宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

未来への航路

⑰メキシコ副王の使者ビスカイノ

「坤輿萬國全圖」の金銀島の部分（図中の活字は筆者注）、東北大学図書館蔵

ビスカイノの来日目的

1611年12月（慶長16年）に発生した慶長津波については、前回紹介した日本の記録だけではなく、海外の史料にも書き残されています。1611年に来日したスペインの探検家セバスティアン・ビスカイノが、1613年に帰国して作成した「金銀島探検報告」です。

ビスカイノは、カリフォルニアを探検して地図を作ったり、領土を拡大したりする探検家でした。マニラからメキシコに至る航路の探検もしましたので、スペイン領メキシコ副王の使者として日本に派遣されて来たのです。

ビスカイノの来日目的は三つありました。一つは、メキシコ副王からの答礼使としての役割です。1608年、前フィリピン総督ロドリゴ・デ・ビベロがマニラからメキシコに帰還する途中、房総半島沖で遭難しました。地元民に救助されましたが、乗船者が前フィリピン総督だということがわかったため、家康はビベロを厚遇し、幕府船でメキシコに送還したのです。

メキシコ副王は本国にいるスペイン国王を補佐し、中南米やアジアにあるスペインの植民地を管轄していましたので、その厚意に謝意を表するためビスカイノを答礼使として派遣したのでした。当時からこうした国際儀礼が存在していたのですね。

二つめは、徳川幕府が求めるメキシコ貿易について交渉するためでした。ビベロが前フィリピン総督だということを知った家康は、駿府で彼を引見し、メキシコと貿易がしたいということを率直に伝えました。メキシコ副王やスペイン国王に提言してもらうには、ビベロはうってつけの立場にあったからなのです。機を見るに敏な家康の性格が、こういうところにも現れています。その提案をビベロが持ち帰り、代わってビスカイノが貿易交渉の任を負って派遣されたのでした。マニラ船の東日本での寄港地を探している最中に慶長津波に遭遇したのですが、それについては次回紹介することにします。

金銀島の探険も目的

三つめは、ビスカイノの報告書が『金銀島探検報告』となっているように、日本近海にあるとされていた金銀島を探し出すことでした。イタリア商人のマルコ・ポーロが各地を歴遊して書いた「東方見聞録」で日本を黄金の国だと紹介して以来、ヨーロッパでは黄金の国ジパングが憧れの地になっています。

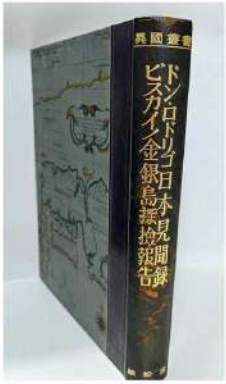
奈良時代に造立された東大寺の大仏には陸奥国の金が使われましたし、平泉中尊寺の金色堂も有名でした。黄金の国ジパングの印象は陸奥国の産金がつくったともいわれています。マルコ・ポーロは日本に来ていませんが、日本が金の産出国だという中国経由の情報が伝わったのではないかとみられています。

アメリカ大陸を発見したコロンブスも、『東方見聞録』に記された黄金の国ジパングを目指していたといわれます。そのあとの探険家であるビスカイノは来日して日本で金銀が産出されていることを確認しましたが、彼は日本近海にあるとされていた金銀島の探索を行いました。

カトリック宣教師のマテオ・リッチが1602年に北京で刊行した『坤輿万国全図』には、この金島と銀島が描かれていました（絵図参照）。実在すると考えられていたことがわかります。

同図では日本沖合の太平洋のことを「小東洋」と読んでいますが、日本列島の左側に記入された文字は「日本海」です。韓国では「日本海」呼称が一般的になったのは日本の植民地支配からだと主張していますが、同図はそれよりはるか以前の17世紀から世界的には「日本海」だと認識されていたことを示しています。

ビスカイノ肖像画（wikipedia より）



『ビスカイノ金銀島探険報告』の背表紙

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。